



認知症のある方の排泄ケア

認知症のある方の自立した排泄が困難になると、介護者は尊厳を守り、清潔を保とうと関わりますが、ご本人にとってはその必要性や意図が通じず、関わり方がどんどん難しくなっていってしまう、ということはないでしょうか？

認知症のある方にとって、尿意・便意を理解し伝えることが困難だったり、これまでできていたことができなくなることへの悔しさや不安を感じる場合があります。そのような心情を理解し、その方の内面にアプローチしていくことが認知症のある方への排泄ケアにはとても重要です。

排泄における認知症の症状

一般的に認知症のある方なら誰でも現れる「中核症状」。排泄においてどのような症状が現れるのか特徴をあげます。

【記憶障害】直前におこったこと等を思い出すことができなくなる

ex・何度もトイレに行きたいと訴える

・洋式便器の使い方はわからないが、和式ならわかる

【失語】言葉が思い出せない、理解が難しくなる

ex・トイレという言葉自体がわからない

・トイレに連れて行ってもらいたいが、上手く伝えられない

【失行】運動機能は正常であっても、動作を遂行することができない

ex・衣服の着脱が上手くできない

・トイレを正しく使うことが出来ない

【失認】普段使っていた物を見ても触ってもそれが何かがわからない

ex・トイレの場所がわからない

・トイレで排泄する意味がわからない

【半側空間無視】視野が狭くなる

ex・便器、トイレトーパー、洗面所等見えない側がある

行動・心理症状(BPSD)は、不適切な周囲の関わりや環境により増強されてしまいます。例えば排泄による汚染を発見した場合、介護者が「汚い!」「何で言ってくれないの」など不満や感情をぶつけてしまうと、認知症のある方は言われている意味がわからず、ただ「怒られた」、「自分を否定された」と感じ気分を害してしまいます。その不満やイライラがまた介護者の不満を煽

ることとなり、BPSDによる負の連鎖が生じるのです。しかしそのような場面では、叱ったり問い詰めたりせず「なぜこのような言動をするのか」ということを、その方の性格や慣れ親しんだ習慣等から考え、理解し、排泄環境や職員の間わり方を工夫するなど、ご本人を尊重したケアを提供することが非常に大切なのです。

また、自立した排泄行為を行うためには、尿や便を出す排泄機能が正常なだけに留まらず、起位移乗や移動・着脱・整容など多くの動作が関連します。認知機能にのみ障害があるのか、運動機能にも障害があるのか、排泄の一連の動作(図2)のうち、どの部分に困難を生じているのかしっかりアセスメントを行い、必要な部分の支援を行いましょ。

ケアを改善させていくには様々な情報が必要になります。その場しのぎの対応で終わらず、ご本人のしぐさや表情をよく観察し、情報をできる限り集め、チームで共有することにより、お互いにとって心地よい関係性を創りあげていきましょう。

図1 BPSDでの認知症の方と介護者の不適切な関係

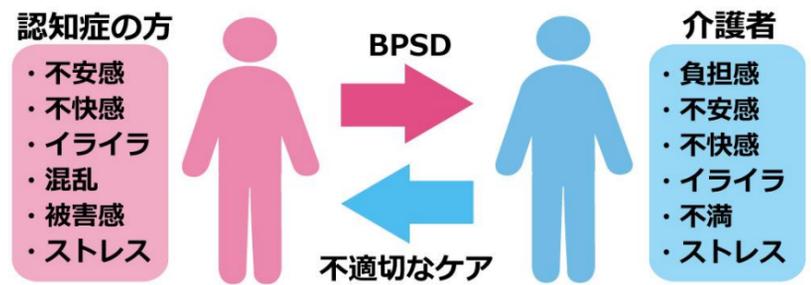
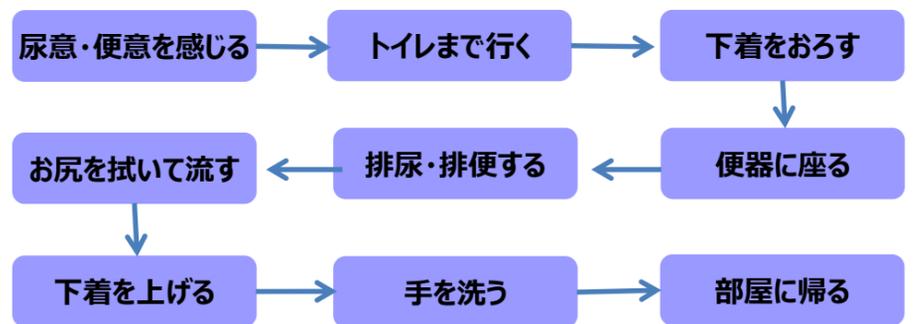


図2 排泄の一連の流れ



光洋マイスター認定第2号

医療法人社団 水野会 平塚十全病院様

令和元年6月12日、光洋マイスター第2号の認定式が平塚十全病院様にて行われました。

今回認定したマイスターの皆様は、小松英美子さん・渡邊綾香さん・佐藤慧介さん・澤野玲代さん・新倉智恵美さん・三橋友和さん・柿内安子さん・佐藤綾子さん・岩本希美さん・高橋純子さんの10名。

2年前より本格的に取り組みを開始し、それぞれに掲げた目標を達成するべく研修に研修を重ね、地道に活動をしてきました。

今後は「排泄ケアのプロ」として、更なる高みを目指し、活躍してください。本当におめでとうございます！

平塚十全病院 マイスターの皆様



音楽療法を取り入れた QOL向上への取り組みについて

アドベンチスト福祉会 特別養護老人ホーム シャローム横浜



今回ご紹介させていただくアドベンチスト福祉会は、取材させていただいた特別養護老人ホーム「シャローム横浜」をはじめ、ケアハウス、グループホーム、地域ケアプラザ、保育園を運営され、「いのちを敬い、いのちを愛し、いのちに仕える」を基本理念に、多方面で地域に密着した社会活動を行なわれている法人です。

音楽療法士の活動

音楽療法士とは

数種類ある民間の資格です。音楽療法士になるためには、演奏技術や音楽療法の知識だけでなく、医学、福祉、心理学など、幅広い高度な知識と技術が必要です。

音楽療法とは

音楽の持つ力を用いて、発声や身体のリハビリ、コミュニケーション能力を高めたり、心の安定を図るなど、介護予防やQOLの向上に繋がります。

シャローム横浜での音楽療法活動

アドベンチスト福祉会は音楽療法士を本格的に導入し、ご利用者様の状態に合わせたプログラムを組み立て日々活動しています。

取材日には次の3つのプログラムが行なわれていました。

①「嚥下機能を高める」グループプログラム

昼食前に嚥下機能を高めたいご利用者様中心に行なわれました。嚥下体操で行なう発声としては「パ・タ・カ・ラ」が有名ですが、その発声を多く使う歌や、歌いやすく皆がよく知っている歌などを選ぶのだそうです。取材日は「カモメの水兵さん」などが歌われていました。

②午後の「個別プログラム」

発語やコミュニケーションが難しくなってきたご利用者様を対象に行われました。まず驚いたのは、臥床でのポジショニングから始められたことです。発声しやすく、音楽の反応が確認できるように、足先まで全身が見える体勢に整えてから行われました。

始めは対象のご利用者様が好む曲が全く分からなかったのですが、関わりを続けていく中で演歌、特に女性歌手の曲がお好きであることが分かり、その日は島倉千代子の「人生いろいろ」、都はるみの「北の宿から」を、西さんが耳元で歌っ

たり、原曲を流して聴いていただいたりしていました。その際、音に合わせて足先を動かされたり、まばたきが多くなったり、頭を持ち上げて何かをお話しようとしている様子があり、その1つ1つを見逃さないように、担当のスタッフと一緒に様子を観察していました。前回との反応の違いや変化なども確認し、日常のケアでの関わりにも活かしているそうです。（個別プログラムでは必ず担当のケアスタッフが1名立ち合います）

③「運動機能を高める」グループプログラム

この日最後のプログラムはボール体操を含めた集団音楽活動でした。鳴子なども使って、歌いながら体を動かします。ももの下にボールを通したり、ややハードな運動もありましたが、歌いながら行なうことで意欲が続き、楽しく行なえるそうです。

音楽療法士 西 愛里さんより

音楽療法は、特養での生活の中でご利用者様の「こうしたいのに出来ない」というもどかしさや不満、不安を解消したり、気分を変える効果があります。日々のプログラムは「心を通したふれあい」です。私は、ご利用者様の気持ちに寄りそった音楽活動をモットーに行なわせていただいています。

その他のシャローム横浜での活動

音楽療法以外にもシャローム横浜では様々な取り組みが行なわれています。タクティール®

ケア認定資格を持つ看護師によるタクティールケアや、回想法の定期開催、看護学会部会の嚥下についての研修を受講したり、リフトメーカーによる移乗介助研修の受講など、その取り組みは多方面にわたっています。

また今年の4月からは光洋との取り組みとして、排泄委員会を立ち上げ、「ご利用者の快適な生活環境を構築する」を目的に月1回委員会を開催しています。光洋の顧客である近隣の2施設の排泄委員会に見学に行かれ、情報交換なども行いました。今後は光洋マイスター制度も導入し、より排泄支援の専門性を高めるといった目標も持たれています。

杉山課長より

このように多方面にわたった取り組みを積極的に取り入れているのは、選択肢を多く持ち、ご利用者様お一人お一人に合わせた最善のケアを提供していくためです。今後ともめまぐるしく進化していく介護業界で、常に多方面にアンテナを張り、新しい情報を収集し、よりよいケアの提供に努めていきます。

— 音楽療法士 西 愛里さんのプロフィール —

国立音楽大学 音楽療法専修学科卒業

3年以上の実務経験を経て、日本音楽療法学会認定の音楽療法士資格を取得される。



ベッドサイドでの個別プログラム



ボール体操を取り入れた音楽療法



音楽療法士 西 愛里さん



ケアサービス課 杉山課長